

たらし、火葬化政策が急激に推し進められた結果、一九九〇年代前半に二割だった火葬率が二〇〇九年には六割に上昇し、大都市圏では八割前後の火葬率となっている。儒教文化の伝統であるところの土葬から火葬へと変化し、特に二〇〇一年の葬事法の改正後は、死者供養のあり方が激変している。こういった韓国社会における人々の意識変化について、世代間や兄弟間の文化や宗教観の違い、そして葛藤等を中心に社会学的に分析した。具体的には、親の葬儀を経験した喪主世代(五〇代)男女に、父と母の葬儀のあり方とその感想、自分の場合はどうか等、子ども世代を視野に入れた意識について、面接調査を通して分析した。

## 多様化する現代日本の

## 「移民と宗教」の理解に向けて

代表者・司会 高橋典史

コメンテータ 中牧弘允

## 現代日本の滞日外国人の宗教状況と

## その研究動向

高橋 典史

本報告は、日本における「移民と宗教」に関するこれまでの研究成果と今後の課題について検討することを目的とした。その前提として本パネルの発表者一同がこれまで共同調査を進めてきた、静岡県浜松市における滞日外国人(以下、「移民」と略す)をめぐる状況と彼ら／彼女らが集う宗教の現状について紹介した。浜松市内の移民が関わる宗教は大きく分けて、(一)カトリック教会(ブラジル人、ペルー人、フィリピン人、ベトナム人などが集う)、(二)南米系のプロテスタント教会(その多くはペンテコステ派であり、ブラジル人、ペルー人、フィリピン人などが集う)、(三)イスラームのモスク(インドネシア人などが集う)、(四)日系新宗教(ブラジル人、ペルー人などが集う)の四種がある。

それらの調査から明らかになって来たのは、移民たちが関わる宗教の多くが地域社会とは没交渉のエスニック・チャーチと

なっており、閉鎖的な「見えない教会」となっている点である。行政はおろか、ごく近隣の日本人住民たちですら、その活動についてほとんど知らない状況にある。一方、カトリック教会や新宗教教団のように以前からあった集団内においても、その内部においてエスニック集団ごとの「棲み分け」がなされており、そのあいだには明確なエスニック・バウンダリーが存在する。ただし、エスニック・チャーチの中にもホスト社会への適応を志向する集団も存在するし、また二〇〇八年秋のリーマン・ショック後に外国人支援に乗り出したカトリック教会のようない例もある。

このような多様でその志向性もさまざまである移民たちの関わる宗教について、今後どのような視点から研究を進めていけば良いのか、その糸口を探すために本発表ではこれまでの先行研究の成果を検討していった。

日本における「移民と宗教」に関する先行研究は、広くはハワイ・南北アメリカ大陸の日系移民に着目した「出移民」に関するものと、滞日外国人を対象とした「入移民」に関するものとに二分できる。前者は一九七〇年代後半から調査・研究が本格化し、その成果が蓄積されて来た。後者も、日本におけるニューカマーの移民たちが増加する一九九〇年代前半くらいから研究が進められており、コリアン、ブラジル人、フィリピン人、ムスリムなどの宗教文化についての研究成果が提出されてきた。

それぞれの地域やエスニック集団に関する研究が進んできたことは高く評価すべきであるが、そこには問題点もあることは

看過できない。例えば、一部の研究者を除き「出移民」研究と「入移民」研究の棲み分けがなされており、双方の研究成果が十分に共有されているとは言い難い。また、狭義の「宗教」研究と人類学や社会学における「移民」研究（エスニシティ研究）も、それぞれの基本的な問題関心のずれもあって、積極的な交流は無かったように見受けられる。さらに、「入移民」研究においては実態をまずは把握することが中心だったせいも、「出移民と宗教」の研究領域で論じられてきた世代間の信仰継承のような長いタイムスパンの問題も、今後の研究課題となるだろう。

こうしたさまざまな問題が山積している「移民と宗教」研究であるが、グローバリゼーションが不可逆的に進行している趨勢にあつては、その重要性はアカデミズムの領域だけでなく、社会的にもますます高まっていくことは間違いない。そこで本発表では、今後、研究者たちが共有していくべきものとして、（一）移民たちの関わる宗教の「社会的形態」や地域社会との関わりへの注目、（二）「移民と宗教のホスト社会への適応・定着」といった図式の上に還元しない姿勢、（三）多様な「移民と宗教」の実像を的確に把握するためのトランスナショナルな研究視角、といった点の重要性を提起した。